

予備校・画塾経験が学生の大学生活に与える影響

- 美術系大学の学生への質問紙調査をもとに -

き 始 あき のり
喜 始 照 宣

〈要 旨〉

本稿の目的は、2013年に美術系大学4校の学生を対象に実施された質問紙調査をもとに、大学入学以前での予備校・画塾経験の差異が、学生の大学生活に与える影響について検討することである。具体的には、つぎの分析課題を設定し、検証する。

分析課題1：予備校・画塾経験は、大学生活での諸活動への熱心さを高めるのか

分析課題2：予備校・画塾経験は、大学生活での悩みや消極性を低減するのか

分析の結果、クロス集計レベルでは、予備校・画塾経験者のほうが、大学生活における、制作活動での熱心さが高い一方で、制作・研究面で悩みを抱く傾向があることが確認される。しかし、多変量解析によって、他の変数の効果を統制した上では、予備校・画塾経験は、1)制作活動での熱心さを高める効果を持たないが、2)制作・研究での悩みをもたらず効果を持つことが示される。よって、予備校・画塾での経験が、その後の学生の生活に及ぼす影響範囲は限定的であり、それは必ずしも正に働かないことが明らかとなる。

〈キーワード〉

美術系大学、大学生、質問紙調査、予備校・画塾経験、大学生活

I. はじめに

本稿の目的は、美術系大学・学部(以下、「美大」という)の学生を対象とした質問紙調査をもとに、大学入学以前での美術系予備校・画塾(以下、「予備校・画塾」という)経験の差異が、その後の学生生活に及ぼすのかについて検討することである。本稿では、特に学生の大学生活での諸活動への熱心さ、及び大学生活での悩み・消極性に着目した分析を行なう。

これまで予備校・画塾が、美大の準備教育機関として、果たしてきた役割は大きい。美大受験に対応した教育・指導を行う高校は少数であることから、特に選抜度の高い有名美大を目指す多くの受験生は、学外の予備校・画塾に足を運び、おもに実技に関わる知識・技術の修得に励んで

きたのである。もちろんその教育内容に対する批判は多方面からあり、予備校・画塾は「必要悪」であるという意見もしばしば聞かれるが¹⁾、荒木(2005)が的確に表現するように、予備校・画塾と大学は実質的な「模倣訓練と創作活動の分業」体制を築いてきたのであり、作家(あるいはアーティスト)やデザイナーの養成機関としての美大の存立は、予備校・画塾との密な関係性のもとに保たれてきたと言っても過言ではないだろう。

しかし、そうした予備校・画塾の貢献が指摘される一方、その具体的な教育の効果については十分な検証がなされてきたとは言えない。そこで、本稿では、予備校・画塾を経験したことがその後の大学生活に及ぼす正負の影響について、美大の学生調査をもとに検討を試みたい。

本稿の構成は、つぎの通りである。まず、Ⅱで先行研究の検討と分析課題の設定を行い、Ⅲでデータと変数の説明をする。つぎに、Ⅳで分析結果を示し、分析課題に答える。そして最後に、Ⅴで本稿の知見をまとめ、そこから示唆される論点を提示する。

Ⅱ. 先行研究の検討と分析課題の設定

高等教育研究において、美大や予備校・画塾を対象とした研究蓄積は未だ乏しい。それゆえ、予備校・画塾経験が学生に及ぼす影響に主眼を置いた先行研究は数少ないが、おもな研究として、荒木(2005)、喜始(2013)、喜始(近刊)などがある。

まず、東京藝術大学の油画科を事例に、芸大受験産業について論じた荒木(2005)では、聞き取り調査等をもとに、予備校・画塾における画一化された「個性」の教え込みに対して批判的態度をとる教員や学生の姿が描かれている。

それに対して、喜始(2013)は、美大5校の美術系学科(絵画、彫刻、工芸など)の学生を対象とした聞き取り調査をもとに、予備校・画塾を経験した学生は、概して、そこで獲得した文化的資源(基礎技術やものの見方など)を、大学入学後の制作活動にとって有用なものとして捉えていることを明らかにしている。また、こうした予備校・画塾に対する学生の肯定的態度は、美大4校での質問紙調査をもとにした喜始(近刊)でも見出されており、予備校・画塾の学科・コース通学者の大多数が、そこでの経験を有用に感じ、肯定的に評価していること、特に女性やそこで厳しい指導を受けた学生で評価が高くなる傾向が示されている。

さらに、デッサン技術の修得だけでなく、「受験時代を共に過ごした学生同士の(時には講師間の)社会的紐帯を育む場として」(荒木 2007, p.400)の予備校・画塾の機能も指摘されており²⁾、予備校・画塾での経験が学生その後の大学生活に与えるインパクトの大きさ及びその持続性がこれらの知見から推察される。

しかし、他方で、予備校・画塾経験がもたらす影響の範囲は限定的であることを示す知見もある。例えば、大学生活満足度の規定要因を検討した喜始(2014)では、予備校・画塾通学経験

の有無による有意な差は見出されていない。そのため、先行研究では、予備校・画塾をどの程度経験したかで、その後の大学生活での取り組みや適応がどう異なるのかについては、データに基づいた検証が不十分なままと言える(喜始 近刊)。

以上の議論を踏まえ、本稿では、分析課題として、つぎの2点を設定する。これらの検証作業を通じて、予備校・画塾経験が学生の大学生活に与える正負の影響を見出すことを試みる。

分析課題1: 予備校・画塾経験は、大学生活での諸活動への熱心さを高めるのか

分析課題2: 予備校・画塾経験は、大学生活での悩みや消極性を低減するのか

以下では、まずクロス集計レベルの分析から、予備校・画塾経験と学生の大学生活における熱心さ及び悩み・消極性との関連性の有無を探る。さらに、そこで統計的に有意な関連性が確認された項目に関しては、多変量解析(ロジスティック回帰分析)を用いた分析を行ない、他の変数の効果を統制した上でも、予備校・画塾経験の効果は残存するのかを検討する。

Ⅲ. データと変数

1. 調査データについて

本稿で使用するデータは、2013年7月～11月にかけて、筆者が独自に実施した「美術系大学生の生活・意識・進路に関するアンケート調査」より得られたものである。調査は、全国の美術系大学4校(うち国公立1校、私立3校)の学生を対象とし、おもに1,2年生が多く受講する授業内で集団自記方式により実施された。有効回答数は学部生526名である。ただし、以下の分析では、出身背景の違いを考慮し、留学生を除く513名分のデータを使用している。統計処理に用いたソフトウェアは「SPSS Statistics 22」である。

この調査では、学生の基本情報、生活全般のことがら、大学入学以前の諸経験、大学受験、進路・将来、そして家族などについて、多角的に尋ねている。また、一般的な大学生調査にはない、美術に関わる過去の教育経験や大学での制作活動、美術系予備校・画塾経験に関する項目も含まれている。そのため、このデータは、他の既存調査からは実態把握が難しい、美術系大学の学生の特徴とその背景を知る上で貴重なものとなっている。なお、調査実施大学及び調査協力者である学生の基本情報については喜始(2014)を参照されたい。

2. 使用する変数について

つづいて、以下の分析で使用する主要な変数について説明する。

まず、予備校・画塾経験については、質問項目「あなたは大学受験のために、美術系予備校・画塾に通いましたか。」に対する回答を用いる。回答は、「1. 学科・コース(基礎科・昼間部・夜間部)に通っていた」、「2. 講習会(夏期講習・冬期講習・直前講習など)のみ参加した」、「3. まっ

たく通っていない」の3区分で構成されている。大学別に見た予備校・画塾経験の有無については、表1を参照されたい³⁾。

つぎに、上記の予備校・画塾経験(3区分)との関連性の検討には、a)大学生活での諸活動への熱心さ、b)大学生活での悩み・消極性に関する質問項目を用いる。具体的には、a)に関しては、表2の5項目を、b)に関しては、表3の10項目をそれぞれ取り上げる。

また、多変量解析で用いる説明変数については、記述統計量を表4に示している。

表1 予備校・画塾経験の有無(度数分布, 大学別)

	美術系予備校・画塾経験の有無			合計	
	学科・コース に通っていた	講習会のみ 参加した	まったく通っ ていない	%	N
A大学(国公立/地方/上位)	73.2	17.1	9.8	100.0	82
B大学(私立/地方/中位)	18.5	14.1	67.4	100.0	92
C大学(私立/都市/上位)	78.3	12.5	9.2	100.0	240
D大学(私立/都市/中位・上)	58.9	23.3	17.8	100.0	90
全体	63.1	15.5	21.4	100.0	504

注: ()内は、設置者/所在地/大学ランク。

表2 大学生活での諸活動への熱心さ(度数分布)

	とても熱 心である	まあ熱心 である	それほど 熱心では ない	まったく 熱心では ない	ない	合計	
						%	N
大学での授業全般	22.7	60.9	15.6	0.8	—	100.0	507
大学内外での制作活動	25.1	45.5	23.3	3.3	2.7	100.0	510
友だちや恋人との付き合い	20.8	49.9	25.5	2.2	1.6	100.0	509
アルバイト	6.9	27.4	22.8	7.9	35.0	100.0	508
クラブやサークルでの活動	17.0	27.0	20.4	8.2	27.4	100.0	511

表3 大学生活での悩み・消極性(度数分布)

	よくある	ときどき ある	あまり ない	ほとんど ない	合計	
					%	N
生活に熱意がわからない	12.8	50.4	26.4	10.4	100.0	508
友だちのことで悩みがある	11.8	39.8	30.4	18.0	100.0	510
先生のことで悩みがある	4.5	18.9	44.4	32.2	100.0	509
制作・研究のことで悩みがある	48.1	37.0	11.4	3.5	100.0	511
授業に興味関心がわからない	6.1	37.8	37.6	18.4	100.0	510
やりたいことが見つからない	12.7	30.6	32.2	24.5	100.0	510
自分には個性がないと焦る	18.1	31.4	29.5	21.0	100.0	509
ほかの学科大学や学校に入り直したい	8.2	21.6	26.1	44.1	100.0	510
大学をやめたい	3.3	9.8	18.4	68.4	100.0	510
まわりの学生のやる気がない	7.6	35.0	37.0	20.4	100.0	511

表 4 多変量解析で用いる説明変数の記述統計量

	N	Mean	S.D.		N	Mean	S.D.
性別:女性(基準:男性)	513	0.778	0.416	大学ランク(上位=1, 中位=0)	513	0.639	0.481
学年(基準:2年生)				大学所在地(都市圏=1, 地方圏=0)	513	0.645	0.479
1年生	512	0.631	0.483	学科(基準:美術系学科)			
3・4年生	512	0.068	0.253	デザイン系学科	510	0.543	0.499
入試形態(一般入試=1, それ以外=0)	513	0.772	0.420	理論系学科	510	0.067	0.250
入学状況(現役入学=1, それ以外=0)	512	0.719	0.450	その他の学科	510	0.100	0.300
入学志望度(第一志望=1, それ以外=0)	510	0.625	0.484	高校:学科(美術科=1, それ以外=0)	509	0.253	0.435
進路選択時に将来の仕事を考慮した (あてはまる=1, あてはまらない=0)	504	0.675	0.469	予備校・画塾経験 (基準:まったく通っていない)			
大学に行けば, やりたいことが見つかると思った (あてはまる=1, あてはまらない=0)	502	0.789	0.409	学科・コースに通っていた	504	0.631	0.483
とりあえず大学に進学しようと思った (あてはまる=1, あてはまらない=0)	502	0.380	0.486	講習会のみ参加した	504	0.155	0.362
授業に興味・関心がわからないこと (ある=1, ない=0)	510	0.439	0.497	中学3年時の成績:すべての科目 (5段階:5=上のほう~1=下のほう)	496	3.550	1.078
熱心さ:大学での授業全般 (熱心=1, 熱心でない=0)	507	0.836	0.370	中学3年時の成績:美術 (5段階:5=上のほう~1=下のほう)	501	4.393	0.967
熱心さ:大学内外での制作活動 (熱心=1, 熱心でない+ない=0)	510	0.706	0.456	父・学歴 (大学・大学院卒=1, それ以外=0)	488	0.615	0.487
熱心さ:友だちや恋人との付き合い (熱心=1, 熱心でない+ない=0)	509	0.707	0.455	母・学歴 (大学・大学院卒=1, それ以外=0)	492	0.352	0.478
熱心さ:アルバイト (熱心=1, 熱心でない+ない=0)	508	0.343	0.475	芸術系学歴保持家族 (いる=1, いない=0)	499	0.152	0.360
熱心さ:クラブやサークルでの活動 (熱心=1, 熱心でない+ない=0)	511	0.440	0.497	芸術系職業従事家族 (いる=1, いない=0)	495	0.168	0.374
悩み:友だちのこと(ある=1, ない=0)	510	0.516	0.500	両親・世帯年収(基準:600万円未満)			
悩み:先生のこと(ある=1, ない=0)	509	0.234	0.424	600万円以上1000万円未満	513	0.324	0.468
悩み:制作・研究のこと(ある=1, ない=0)	511	0.851	0.356	1000万円以上	513	0.136	0.344
まわりの学生のやる気(ない=1, ある=0)	511	0.427	0.495	無回答	513	0.257	0.438
自分の将来に対する不安(感じる=1, 感じない=0)	502	0.845	0.363				

IV. 分析の結果

1. 大学生活での諸活動への熱心さ:分析課題1の検証

(1) クロス集計の結果

まず, 予備校・画塾経験の差異は, 学生の様々な活動への熱心さに影響を与えているのだろうか。予備校・画塾経験と大学生活での諸活動への熱心さの関連性を見ることで, 分析課題1を検討する。クロス集計による分析の結果は表5に示した通りである。なお, 表中の割合(%)は, 「とても熱心である」と「まあ熱心である」を合算した数値である。

表5の結果を見ると, 1)「大学内外での制作活動」・「クラブやサークルでの活動」に関しては, 予備校・画塾経験の割合が高いほうが, それらに熱心に取り組んでいること, 2)「大学での授業全般」に熱心な学生の割合は, 予備校・画塾を何らかのかたちで経験した場合に8割以上と高いこと, 3)「友だちや恋人との付き合い」に熱心な学生の割合は, 講習会のみ参加であった場合に高く, 学科・コース通学の場合に低いこと, そして4)「アルバイト」に熱心な学生の割合は, 予備校・画塾を経験したかどうかによってほとんど異なることがわかる。

ただし, χ^2 検定(3×2のクロス表⁴⁾, 自由度=2)の結果を見ると, 「大学内外での制作活動」へ

の熱心さ(以下、「制作熱心さ」という)のみが5%水準以下で統計的に有意となっている。「友だちや恋人との付き合い」も10%水準ではあるが有意である。しかし、それ以外の項目については、予備校・画塾経験の差異と大学生活での諸活動への熱心さとの関連性は確認できない。この結果から、予備校・画塾経験は、特に学生の大学生活における制作活動の熱心さに影響している可能性が示唆される。

表5 予備校・画塾経験と大学生活での諸活動への熱心さの関連性

「とても熱心である」＋「まあ熱心である」の割合(%)	予備校に通っていたか否か			合計
	学科・コースに通学	講習会のみ	まったく通っていない	
大学での授業全般 n.s.	84.4	87.0	77.8	83.4
大学内外での制作活動 *	74.5	66.2	61.7	70.5
友だちや恋人との付き合い †	67.5	80.5	72.9	70.7
アルバイト n.s.	33.9	33.8	35.5	34.2
クラブやサークルでの活動 n.s.	44.7	42.9	39.8	43.3

注: χ^2 検定. n.s.: $p>0.10$, †: $p<0.10$, *: $p<0.05$.

(2) 順序ロジスティック回帰分析の結果

では、予備校・画塾経験が学生の制作熱心さに与える影響はどれほど強いのだろうか。ここでは、他の変数の効果を統制した上でも、予備校・画塾経験の効果は残るのかについて、「制作熱心さ」を被説明変数とした順序ロジスティック回帰分析を行なう。分析では、学生の基本情報、過去の教育経験、ハード面での大学環境に関する変数を投入したモデルI、及びモデルIに進路意識や将来不安、熱心さや悩みなどの意識変数を追加投入したモデルIIの2つのモデルを検討している。分析結果は表6に掲示した通りである。

なお、分析に際して、平行性の仮定を満たすために、被説明変数を「3. とても熱心である」、「2. まあ熱心である」、「1. (それほど+まったく)熱心ではない+ない」の3区分に変換し投入している。また、説明変数として、予備校・画塾経験変数を投入する場合、「まったく通っていない」を基準とし、「学科・コースに通っていた」及び「講習会のみ参加した」をダミー変数(それぞれ該当する場合を1、そうでない場合を0)とした。他の説明変数については、表中に略記したため、変数の設定に関する詳細は割愛する。

それでは分析の結果を読もう。表6から、「制作熱心さ」の規定要因を見ると、まずモデルIでは、性別(-)、入試形態(-)、大学ランク(+)、学科(理論系の場合に-)が5%水準以下で統計的に有意な効果を示している。予備校・画塾経験に関しては、有意な効果が確認されない。つづいて意識の諸変数を投入したモデルIIでは、モデルIで有意であった入試形態、大学ランクの効果が消え、かわって、「とりあえず大学に進学しようと思った」(-)、「授業に興味関心がわかないこと」(-)、「熱心さ:友だちや恋人との付き合い」(+),「熱心さ:クラブ・サークルでの活動」(+), 学科(その他の学科の場合に-)、両親・世帯年収(600万円以上1000万円未満の場合に+)が5%

水準以下で有意となっている。また、予備校・画塾経験についても、「講習会のみ参加した」が5%水準で負(-)の効果を示している。すなわち、他の変数の効果を統制した場合、予備校・画塾に「講習会のみ参加した」学生は、「まったく通っていない」学生と比べて、大学内外での制作活動に熱心ではない傾向が観察されたのである。ただし、「学科・コースに通っていた」ことの効果は表れていない。そのため、ここでの分析結果から、「予備校・画塾経験は学生の制作熱心さを高める」という明瞭な関係性は見て取れない。

表6 「制作熱心さ」の規定要因(順序ロジスティック回帰分析)

被説明変数:制作熱心さ(3段階)	モデルⅠ		モデルⅡ	
	係数	S.E.	係数	S.E.
性別:女性(基準:男性)	-0.694	0.240 **	-0.576	0.260 *
学年(基準:2年生)				
1年生	0.117	0.247	0.139	0.262
3・4年生	0.501	0.415	0.724	0.463
入試形態(一般入試=1, それ以外=0)	-0.827	0.294 **	-0.555	0.315 †
入学状況(現役入学=1, それ以外=0)	-0.065	0.230	0.072	0.246
入学志望度(第一志望=1, それ以外=0)	0.183	0.209	-0.051	0.222
進路選択時に将来の仕事を考えていた(あてはまる=1, あてはまらない=0)			0.049	0.256
大学に行けば、やりたいことが見つかると思った(あてはまる=1, あてはまらない=0)			-0.447	0.249 †
とりあえず大学に進学しようと思った(あてはまる=1, あてはまらない=0)			-0.576	0.225 *
授業に興味・関心がわからないこと(ある=1, ない=0)			-0.594	0.217 **
熱心さ:大学での授業全般(熱心=1, 熱心でない=0)			0.182	0.295
熱心さ:友だちや恋人との付き合い(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			0.661	0.230 **
熱心さ:アルバイト(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			-0.005	0.207
熱心さ:クラブやサークルでの活動(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			0.603	0.213 **
悩み:友だちのこと(ある=1, ない=0)			-0.254	0.212
悩み:先生のこと(ある=1, ない=0)			0.461	0.250 †
悩み:制作・研究のこと(ある=1, ない=0)			0.161	0.314
まわりの学生のやる気(ない=1, ある=0)			0.189	0.204
自分の将来に対する不安(感じる=1, 感じない=0)			-0.500	0.293 †
大学ランク(上位=1, 中位=0)	0.614	0.282 *	0.326	0.302
大学所在地(都市圏=1, 地方圏=0)	-0.094	0.299	0.203	0.325
学科(基準:美術系学科)				
デザイン系学科	-0.312	0.283	-0.638	0.325 †
理論系学科	-1.439	0.456 **	-1.769	0.492 ***
その他の学科	-0.489	0.407	-0.972	0.447 *
高校・学科(美術科=1, それ以外=0)	0.142	0.228	0.252	0.244
予備校・画塾経験(基準:まったく通っていない)				
学科・コースに通っていた	0.254	0.297	0.092	0.323
講習会のみ参加した	-0.403	0.334	-0.798	0.367 *
中学3年時の成績:すべての科目(5段階)	-0.023	0.096	0.016	0.101
中学3年時の成績:美術(5段階)	0.089	0.106	0.087	0.112
父・学歴(大学・大学院卒=1, それ以外=0)	0.054	0.213	-0.092	0.228
母・学歴(大学・大学院卒=1, それ以外=0)	-0.040	0.212	-0.184	0.223
芸術系学歴保持家族(いる=1, いない=0)	0.256	0.303	-0.175	0.331
芸術系職業従事家族(いる=1, いない=0)	0.159	0.291	0.073	0.311
両親・世帯年収(基準:600万円未満)				
600万円以上1000万円未満	0.257	0.238	0.607	0.256 *
1000万円以上	-0.047	0.306	0.237	0.327
無回答	-0.035	0.260	0.221	0.276
閾値1	-1.366	0.635 *	-1.571	0.771 *
閾値2	0.818	0.633	0.899	0.769
-2対数尤度		895.191		804.361
χ^2 値(自由度)		46.270(23) **		106.587(36) ***
Nagelkerke R ²		0.112		0.249
N		444		431

注: †: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001.

2. 大学生生活での悩み・消極性：分析課題2の検証

(1) クロス集計の結果

つぎに、大学生生活での悩み・消極性に関してはどうか。クロス集計をもとに、予備校・画塾経験と大学生生活での悩み・消極性との関連性を示したものが、表7である。なお、表中の割合(%)は、「よくある」と「ときどきある」を合算した数値である。

表7 予備校・画塾経験と大学生生活での悩み・消極性との関連性

「よくある」+「ときどきある」の割合 (%)	予備校に通っていたか否か			合計
	学科・コース に通学	講習会のみ	まったく通っ ていない	
生活に熱意がわからない n.s.	61.9	70.5	62.0	63.3
友だちのことで悩みがある n.s.	51.6	44.2	56.5	51.5
先生のことでの悩みがある n.s.	23.7	19.5	25.9	23.5
制作・研究のことでの悩みがある ***	89.0	88.5	71.3	85.1
授業に興味関心がわからない n.s.	44.3	44.2	42.6	43.9
やりたいことが見つからない n.s.	41.5	44.2	47.2	43.1
自分には個性がないと焦る n.s.	50.5	53.8	42.1	49.2
ほかの学科大学や学校に入り直したい n.s.	31.2	29.5	25.9	29.8
大学をやめたい n.s.	12.6	12.8	13.9	12.9
まわりの学生のやる気がない n.s.	44.3	39.7	40.7	42.9

注： χ^2 検定。n.s.： $p>0.10$ ，***： $p<0.001$ 。

表7の結果を見ると、1)予備校・画塾の講習会のみ参加の場合、「生活に熱意がわからない」学生の割合は7割程度と高いが、「友だち／先生のことでの悩みがある」学生の割合は相対的に低いこと、2)「制作・研究のことでの悩みがある」学生、「自分には個性がないと焦る」学生の割合は、予備校・画塾に通わなかった場合に相対的に低くなること、3)「授業に興味関心がわからない」学生や「大学をやめたい」学生の割合は、予備校・画塾経験によってほとんど異なること、4)予備校・画塾経験の度合いが低いほど、「やりたいことが見つからない」学生の割合は高くなるが、「ほかの学科・大学や学校に入り直したい」学生の割合は低くなること、5)「まわりの学生のやる気がない」と感じる学生は、予備校・画塾の学科・コース通学経験者で若干高いことがわかる。特に2)や4)の結果は注目される。

しかし、 χ^2 検定(3×2のクロス表⁵⁾、自由度=2)の結果を見ると、「制作・研究のことでの悩みがある」(以下、「制作・研究の悩み」という)のみ、0.1%水準で有意となっており、それ以外の項目では統計的に有意な差は見出されない。そのため、予備校・画塾経験は、特に「制作・研究の悩み」を学生にもたらず働きをする可能性があると考えられる。

表 8 「制作・研究の悩み」の規定要因(順序ロジスティック回帰分析)

被説明変数:制作・研究の悩み(3段階)	モデルⅠ		モデルⅡ	
	係数	S.E.	係数	S.E.
性別:女性(基準:男性)	0.589	0.242 *	0.499	0.263 †
学年(基準:2年生)				
1年生	-0.675	0.266 *	-1.016	0.286 ***
3・4年生	0.174	0.435	-0.046	0.486
入試形態(一般入試=1, それ以外=0)	-0.044	0.297	0.100	0.324
入学状況(現役入学=1, それ以外=0)	-0.088	0.240	-0.143	0.258
入学志望度(第一志望=1, それ以外=0)	-0.125	0.218	0.000	0.233
進路選択時に将来の仕事を考えて(あてはまる=1, あてはまらない=0)			0.182	0.265
大学に行けば、やりたいことが見つかると思った(あてはまる=1, あてはまらない=0)			0.519	0.257 *
とりあえず大学に進学しようと思った(あてはまる=1, あてはまらない=0)			-0.287	0.236
授業に興味・関心がわかないこと(ある=1, ない=0)			0.201	0.229
熱心さ:大学での授業全般(熱心=1, 熱心でない=0)			0.398	0.302
熱心さ:大学内外での制作活動(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			0.210	0.243
熱心さ:友だちや恋人との付き合い(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			-0.182	0.239
熱心さ:アルバイト(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			0.411	0.220 †
熱心さ:クラブやサークルでの活動(熱心=1, 熱心でない+ない=0)			-0.308	0.229
悩み:友だちのこと(ある=1, ない=0)			0.624	0.220 **
悩み:先生のこと(ある=1, ない=0)			0.773	0.280 **
まわりの学生のやる気(ない=1, ある=0)			0.071	0.215
自分の将来に対する不安(感じる=1, 感じない=0)			0.771	0.298 *
大学ランク(上位=1, 中位=0)	0.377	0.294	0.705	0.318 *
大学所在地(都市圏=1, 地方圏=0)	0.764	0.310 *	0.368	0.337
学科(基準:美術系学科)				
デザイン系学科	-0.065	0.299	0.069	0.346
理論系学科	-0.102	0.450	-0.268	0.489
その他の学科	0.186	0.435	0.543	0.497
高校・学科(美術科=1, それ以外=0)	0.116	0.237	0.112	0.255
予備校・画塾経験(基準:まったく通っていない)				
学科・コースに通っていた	0.770	0.301 *	0.807	0.325 *
講習会のみ参加した	0.717	0.338 *	1.041	0.372 **
中学3年時の成績:すべての科目(5段階)	-0.073	0.100	-0.095	0.106
中学3年時の成績:美術(5段階)	0.003	0.110	0.005	0.118
父・学歴(大学・大学院卒=1, それ以外=0)	0.415	0.221 †	0.262	0.238
母・学歴(大学・大学院卒=1, それ以外=0)	-0.006	0.223	0.097	0.235
芸術系学歴保持家族(いる=1, いない=0)	-0.688	0.320 *	-0.497	0.352
芸術系職業従事家族(いる=1, いない=0)	0.527	0.316 †	0.457	0.341
両親・世帯年収(基準:600万円未満)				
600万円以上1000万円未満	-0.153	0.248	-0.108	0.269
1000万円以上	-0.511	0.319	-0.335	0.344
無回答	-0.353	0.270	-0.350	0.290
閾値1	-1.021	0.655	0.668	0.802
閾値2	1.123	0.656 †	3.080	0.819 ***
-2対数尤度		806.169		720.856
χ^2 値(自由度)		80.679(23) ***		129.713(36) ***
Nagelkerke R ²		0.192		0.302
N		446		431

注: †: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001.

(2) 順序ロジスティック回帰分析の結果

では、「制作・研究の悩み」に対する予備校・画塾経験の効果は、他の変数の効果を統制した上でも残るのだろうか。前節同様、順序ロジスティック回帰分析をもとに、2つのモデルを検討する。「制作・研究の悩み」を被説明変数とした分析結果は表8に示した通りである。

なお、分析に際して、平行性の仮定を満たすために、「制作・研究の悩み」変数を「3. よくある」、「2. ときどきある」、「1. (あまり+)ほとんどない」の3区分に変換し投入している。また、説明変数の設定は、前節と同じであり、表中に略記している。

それでは、表8から、「制作・研究の悩み」の規定要因を見ていこう。まずモデルIでは、性別

(+), 学年(1年生の場合に-), 大学所在地(+), 芸術系学歴保持家族(-)が5%水準以下で有意な効果を示している。また, 予備校・画塾経験の「学科・コースに通っていた」「講習会のみ参加した」ともに, 5%水準で有意となっている。つづいて意識の諸変数を投入したモデルⅡを見ると, モデルⅠで有意であった性別, 大学所在地, 芸術系学歴保持家族の効果は消え, それにかわり, 「大学に行けば, やりたいことが見つかると思った」, 「悩み: 友だちのこと」, 「悩み: 先生のこと」, 「自分の将来に対する不安」, 「大学ランク」(すべて+)が5%水準以下で有意となっている。また, 予備校・画塾経験に関する変数は, モデルⅡにおいても, 5%水準以下で有意な正の効果を示している。したがって, 「予備校・画塾経験は学生に制作・研究の悩みをもたらす」という関係性は, 他の変数の効果を統制した上でも残存することが, ここから確認された。

V. まとめ

以上, 美大の学生を対象とした質問紙調査をもとに, 予備校・画塾経験が学生の大学生活での取り組みや悩み・消極性に与える影響について分析した。その結果, クロス集計レベルでは, 予備校・画塾経験者のほうが, 大学生活における, 制作活動での熱心さが高い一方で, 制作・研究面で悩みを抱いている傾向が確認された。しかし, 多変量解析をもとに分析を進めたところ, 他の変数の効果を統制した上では, 予備校・画塾経験は, 1)制作活動での熱心さを高める効果を持たないが, 2)制作・研究での悩みをもたらす効果を持つことが示された。大学入学以前に予備校・画塾を経験したことが, 学生の大学生活, 特に制作活動面に及ぼす影響の範囲は限定的であり, 必ずしも正の働きをするわけではないこと, それを明らかにしたことに, 本稿の研究上の意義があると考えられる。

では, なぜ予備校・画塾経験は, 学生の大学内外での制作熱心さを高めはしないが, 制作・研究面での悩みを抱かせるように働くのだろうか。まず, 大学内外での制作熱心さに関しては, それが過去の教育経験よりも, 現在の本人が置かれている文脈や状況, あるいは目的意識を持って進学したか否かにより左右される側面が強いためであると考えられる。これは, 大学生生活満足度に関する喜始(2014)の知見と, ある程度共通する⁶⁾。予備校・画塾を経験したか否かに関わらず, 大学環境や人的ネットワークを有効に活用できている場合には, 制作活動に対する熱心さは自ずと高められていくのではないだろうか。しかし, それと同時に, 表6の多変量解析の結果, 予備校・画塾の「講習会のみ参加」は, 「まったく通っていない」と比べて, 制作熱心さに対して負の効果を持つことが示された。この解釈は難しい。予備校・画塾の断続的な利用は, そこでの十分な文化的資源の獲得に結び付かず, それゆえに, かえって高められた理想と現実とのギャップに学生を直面させてしまうのだろうか。この解釈の妥当性については, 量的データのみから判断するには限界があるため, 聞き取り調査など, 質的データとの往復作業のもと, さらなる検証を行うことが

不可欠だろう。

つぎに、なぜ予備校・画塾経験が制作・研究面での悩みと結びつくのか。これを考えるには、ここでの「悩み」がどのようなものか、その質を考える必要があるだろう。予備校・画塾通学者の大多数が、そこでの経験に有用性を感じ、満足していることを先行研究(喜始 近刊)は示しているが、この知見と考え合わせると、大学生活における制作・研究面での悩みは、より高度な表現行為の追求ゆえに生じるものではないかと考えられる。もしそうであるならば、予備校・画塾は、その後の制作活動にとって重要な発展の契機を与えていると解釈される。だが、予備校・画塾を継続的に利用する(学科・コース通学)か、断続的に利用する(講習会のみ参加)かによって、制作熱心さが異なる可能性があるように、ここで問題とした「悩み」にも両者で質的差異があるかもしれない。これについても、先と同様、今回の分析から判断するには限界がある。また、今回の議論を、学生の語りから抽出された、美大における「現役コンプレックス」現象(現役入学生が浪人入学生に対して抱く劣位性の感情)(喜始 2013)とどのように接合するかという点にも課題がある。そのため、これらの限界を乗り越え、美大と予備校・画塾の相互関係について、さらなる知見の提供をすることを今後目指していきたい。

〈注〉

- 1) 例えば、美術手帖編集部(2009)において、アーティスト・村上隆は、「ここ30年以上、美大受験予備校の教育はアーティスト育成において『必要悪』だ、と業界内一般論として刷り込まれ続けてきました。」(p. 68)と述べている。
- 2) 加えて、「一般の受験予備校と異なり、芸術系の場合のそれは受験生のその後の人生において、つまり将来の作家活動においても、出発点となる最初の基礎教育の段階でなされるデッサン教育は、その後の人格形成に程度の差はあれ影響を及ぼす」という意見もある(木津 2011, p. 91)。また、本稿では美大受験対策の予備校・画塾についてのみ扱うが、一般的な受験予備校の場合でも、その経験価値についての指摘がある。例えば、予備校での浪人生活を扱った塚田(1999)は、「『哲学する』ことを通して、受験競争にある矛盾に気づき、受験体制の論理を超え得たならば、浪人生活は人間の生活、社会にとって何が重要なのかを思索する貴重な時期であると感じるのではないであろうか。」(p.168)と述べている。
- 3) 表1を見ると、大学ごとに予備校・画塾経験者の構成比は異なっており、特にB大学(私立/地方/中位)では、他の大学と比べて、「まったく通っていない」学生が多数派である。そのため、大学別の、あるいは各大学の学科構成を踏まえた分析が必要であると考えられる。しかし、サンプル数の制約のため、本稿では、クロス集計レベルの分析で、全体についてのみ検討し、つづく順序ロジスティック回帰分析で、「大学ランク」及び「大学所在地」を統制変数として投入した検証を行うこととした。予備校・画塾経験が学生の大学生活に与える影響に関する、大学ごとの多様性を踏まえた、より詳細かつ精密な分析は今後の課題としたい。
- 4) ここでは、熱心さに関する諸変数を「(とても+まあ)熱心である」と「(それほど+まったく)熱心でない+ない」の2区分としている。なお、「大学での授業全般」に、「ない」の項目は設定されていない。
- 5) ここでは、悩み・消極性に関する諸変数を「(よく+ときどき)ある」と「(あまり+ほとんど)ない」の2区分

としている。

- 6) ただし、学生制作熱心さと大学生生活満足度との関連性はそれほど強くない。喜始(2014)では、平均値の差の検定から、制作活動に熱心であるか否かによって、大学生生活満足度の平均値には統計的に有意な差(1%水準)があることが示されているが、多変量解析において、他の変数の効果を統制した上では、その効果は明瞭でなくなっている。

〈参考文献〉

- 1) 荒木慎也：つくられる個性 - 東京芸術大学と受験産業の美術教育 - ，東京大学大学院総合文化研究科修士学位論文，2005.
- 2) 荒木慎也(多木浩二・藤枝晃雄監修)：美術学校・大学の予備校，日本近現代美術史事典，東京書籍，p.400, 2007.
- 3) 美術手帖編集部：日本の美術教育徹底討論，美術手帖，美術出版社，61(928)：pp.66-75，2009.
- 4) 木津文哉(東京芸術大学美術教育研究室編)：見えるものと創ること - デッサン考 - ，美術と教育のあいだ，東京芸術大学出版会，pp.84-106，2011.
- 5) 喜始照宣：美術系大学生と予備校 - 大学生生活における現役／浪人の差異に着目して - ，東京大学大学院教育学研究科紀要，52：pp.137-146，2013.
- 6) 喜始照宣：美術系大学における学生の大学生生活満足度の規定要因 - 学生を対象とした質問紙調査をもとに - ，大学教育学会誌，36(2)：pp.86-95，2014.
- 7) 喜始照宣：美術系大学の学生の予備校・画塾経験 - 学生への質問紙調査をもとに - ，東京大学大学院教育学研究科紀要，55，近刊.
- 8) 村上隆：芸術闘争論，幻冬舎，2010.
- 9) 塚田守：浪人生のソシオロジー - 1年の予備校生活 - ，大学教育出版，1999.